



This month's column

Mao Havannall 大臣、日本の技術に期待

カムフラージュ機材の運送を実現する技術開発による効率化とコスト削減が大きな課題



飛行機の運送は、機材の輸送コストが最も高いとされています。日本では、機材の輸送コストを削減するため、カムフラージュ機材の運送技術を開発する取り組みが進められています。この技術により、機材の輸送コストが大幅に削減されることが期待されています。

一方で、機材の輸送コストを削減する一方で、機材の輸送時間や品質管理が課題となっています。機材の輸送時間は、機材の輸送距離や輸送手段によって大きく異なります。また、機材の品質管理は、機材の輸送過程における温度管理や湿度管理など、複数の要因によって影響を受けます。

機材の輸送コストを削減するためには、機材の輸送手段を最適化する必要があります。機材の輸送手段としては、空輸、船輸、陸路輸送があります。機材の輸送手段を最適化するためには、機材の輸送距離や輸送時間、機材の品質管理などを考慮した最適な輸送手段を選択することが重要です。

機材の輸送コストを削減するためには、機材の輸送手段を最適化する必要があります。機材の輸送手段としては、空輸、船輸、陸路輸送があります。機材の輸送手段を最適化するためには、機材の輸送距離や輸送時間、機材の品質管理などを考慮した最適な輸送手段を選択することが重要です。

機材の輸送コストを削減するためには、機材の輸送手段を最適化する必要があります。機材の輸送手段としては、空輸、船輸、陸路輸送があります。機材の輸送手段を最適化するためには、機材の輸送距離や輸送時間、機材の品質管理などを考慮した最適な輸送手段を選択することが重要です。

機材の輸送コストを削減するためには、機材の輸送手段を最適化する必要があります。機材の輸送手段としては、空輸、船輸、陸路輸送があります。機材の輸送手段を最適化するためには、機材の輸送距離や輸送時間、機材の品質管理などを考慮した最適な輸送手段を選択することが重要です。

機材の輸送コストを削減するためには、機材の輸送手段を最適化する必要があります。

JATIC NEWS 12月号注目記事 ラインナップ

☆インタビュー日本語 P4-5

☆世界空港建設技術者 P14-15

☆カンボジア視察団同行取材 P6-13

カムフラージュ機材の運送技術 P6-13

日本先端技術国際インフラ協力機構
Japan Advanced Technology International Infrastructure Cooperation Organization

加盟企業募集中！

詳しくはホームページをご覧ください
<https://jatic.jp/>

11月24日、Mao Havannall 民間航空大臣をはじめ9名の国務長官らが成田空港に降り立った。

今回のMao Havannall大臣らの来日の目的は、観光立国カンボジアの未来を見据えた空港インフラ技術の交流や、風力、太陽光、バイオマスによる発電など再生可能エネルギー技術の視察を行うことである。そして、持続可能な発展を実現するための新しいパートナーシップの構築を目指している。

この視察は、2022年に当時の岸田首相とフン・セン首相の間で両国関係を包括的戦略パートナーシップに格上げすることに合意した流れを受けたもので、9名も擁する視察団の規模がその期待の高さを反映している。

カンボジアの経済発展を支える基盤として空港インフラの整備は最重要課題と言っても過言ではない。カンボジアでは、2025年にはデチヨ新国際空港の開港が予定されている。2030年には3000万人、2050年には5000万人の利用者を見込んでおり、この成長に対応するための準備が急務である。年間8000万人が利用する羽田空港の先進技術や効率的な運営モデル、さらには案内や接客における高いホスピタリティは、新空港発展にとって貴重な参考事例となり得る。この視察を通じ、両国の技術交流がカンボジアの観光産業の持続可能な成長に大きく寄与するだろう。

一方で、エネルギー分野においては、近年カンボジアの目覚ましい発展に伴い、電力需要の急増が深刻な課題として浮上している。過去10年間で国内の電力需要が約3.8倍と年々高まり、減少傾向にあった輸入電力が2019年からは再び拡大傾向に転じ、2023年には全体の21%を占めるまでになった。この状況は、経済安全保障上の観点においても、自国での発電比率の向上が喫緊の課題となっている。

さらに、世界的な脱炭素の流れを受け、カンボジア政府は2022年9月に再生可能エネルギーへの移行を含めた電力マスタープランを承認した。現状、主力となっている石炭火力発電の割合の引き下げを目指している。

これらの背景から、今回の大臣らの視察の期待と意気込みは自然な流れといえる。カンボジアは、シアヌークビル港のインフラ整備や、首都プノンペンとシアヌークビルを結ぶ高速道路プロジェクトなど、中国との協力を進めてきた。しかし、カンボジア政府はこれにとどまらず、各国と多角的なパートナーシップを模索している。日本の技術やサービスがカンボジアの持続可能な発展に寄与する余地は依然として大きい。

今回の大臣らの視察をアレンジした一般財団法人日本先端技術国際インフラ協力機構（以下、JATIC）の柏野代表理事は、「私たちJATICが、カンボジアの持続可能な発展に寄与するとともに、両国の包括的戦略パートナーシップの具体的な進展のきっかけとなることに大きな意義を感じております。視察前の打ち合わせから、大臣と視察団の高い期待と熱意を強く感じており、責任の重さを痛感しております。視察はあくまでもスタートに過ぎません。今回のプロジェクトがしっかりと実を結ぶよう、視察後も具体的な進展を全力でサポートしてまいります。」と述べ、今後の取組に意欲を示した。さらに「今回の視察内容に入っていない分野でも、日本が海外で活かせる技術やサービス、製品はまだ多く存在します。また、日本とカンボジア両国の橋渡しを目的とした企業や団体は多いものの、海外進出を自主的に目指す企業が中心です。しかし、これまで海外に目を向けていなかった企業の中には、自社で気づかない魅力や優位性を持つ技術やサービス、製品が埋もれている例は少なくありません。だからこそ、私たちJATICはそうした潜在力をを持つ技術やサービス、製品を発掘し、それらが世界で輝ける支援を行いたいと考えています。」と述べ、日本国内での潜在的な技術力の掘り起こしにも意欲を示した。

今回弊紙では視察の全行程に同行し、カンボジア視察団が何に興味を持ち、何を評価し、日本の技術やサービスをどう感じたのかを探ることで、今後の両国のパートナーシップの構築・発展の参考になればと思う。視察の様子は6ページ

インタビュー



一般財団法人 日本先端技術国際インフラ協力機構

代表理事 柏野宏之
香川県出身1967年6月生まれ
趣味：ゴルフ

JATICの挑戦：日本とカンボジアの未来をつなぐ技術交流視察

まず JATICについて教えてください。

一般財団法人日本先端技術国際インフラ協力機構（以下、「JATIC」）は、発足間もない財団ですが、日本とカンボジア双方の市場参入を円滑かつ適切にサポートする事を目的としています。

大企業は豊富な資金力や人材力、独自のリサーチ力、広範なネットワークを持つ一方で、中小企業はそのようなリソースを持たないため、以下の課題に直面し、進出初期段階から大きなビジネスリスクを抱えることがあります。

- 必要な市場情報へのアクセス不足
- 信頼できる現地パートナーの不足
- 公的機関からの十分な支援の欠如

さらに、情報不足により、一部の企業や経営者が不当な被害を受けるケースもあります。そのため、JATICは、中小企業の海外進出を包括的に支援するため、以下の具体的な取り組みを行っています。

- 現地政府や企業との信頼構築を基盤とした情報提供
- 日本とカンボジア双方の企業をつなぐマッチング機会の提供
- 現地での初期サポートを通じた安心の提供

このような支援を通じて、日本とカンボジアの技術と需要を結びつけ、両国の経済的および社会的発展に貢献することを JATIC の使命としています。

視察が実現した経緯を教えてください。

長くなりますが、JATICを語る上で重要な部分ですでのお話しします。

今回の視察プロジェクトのきっかけは、在仙台カンボジア王国名誉領事の田井領事との出会いに遡ります。当時、私は東南アジアでの海外進出支援コンサルタントとして活動しており、JICAやJETROを訪問したり、在日本の各領事にも相談したりしていました。しかし、公的機関からの支援が得られず、フラストレーションを感じていた時期でした。そんな中、田井領事に「民間の速度感に合わせた支援が公的機関から得られないため、プロジェクトが停滞してしまう」と率直な意見を述べたことがありました。田井領事はその発言を笑って受け止め、私の意図を汲んでくださいました。この出来事をきっかけに、田井領事との信頼関係が築かれ、継続的な協力関係を構築できました。

今年の1月に田井領事がフン・マネット首相特別補佐官に任命されたことを契機に、日本企業やカンボジアのためにもっと精力的に支援をしたいという田井領事の思いを聞いた私は、まずカンボジアの課題の一つであるエネルギー分野に着目しました。田井領事の秘書官である渋井ソンダップさんと民間航空庁の顧問 Prou Saony 閣下が、エネルギー省の副長官との会談の場を設けてくださいました。

副長官からは、「日本の大手企業の提案は魅力的だが、時間がかかりすぎる」という課題が示されました。この指摘を受け、大手企業に比べると提案規模

は小さくなるものの、日本の中小企業が持つ革新的な技術を中心とした、迅速かつ実現可能なプロジェクトを提案しました。すると副長官は「その中小企業の技術を直接日本で見に行く」とおっしゃったのです。

これが今回の視察のきっかけとなりました。

結局、副長官はスケジュールの都合で参加できませんでしたが、信頼されている優秀な部下の方が代わりにいらっしゃいました。

前述の渋井ソンダップ秘書官とリアム・チビット領事秘書官の尽力がなければ、今回の視察は成功しなかったでしょう。この場を借りて両名に感謝申し上げたいと思います。

Mao Havannall 大臣の印象を教えてください。

Mao Havannall 大臣は、フン・セン前首相時代から唯一留任された大臣であり、日本外交の重要な窓口として最適な方だと感じています。さらに、大臣をはじめ同行された国務長官の皆様も非常に若く、優秀でありながらフレンドリーだったことに驚かされました。このことは、私自身がカンボジアの政府関係者に対する偏見が無意識にあったんだと気付かされました。

視察中のエピソードとして、25日に行われたレセプションパーティーがあります。この場では、Prou Sythan 顧問兼弁護士と Bun Sovann 顧問兼弁護士がカンボジア投資に関するプレゼンテーションを行い、日本の参加企

インタビュー

業も自社のサービス内容などを紹介しました。その際、最も熱心に耳を傾け、議論していたのはカンボジア側の皆様でした。

Mao Havannall 大臣や国務長官の方々が示された真摯な姿勢は、カンボジア政府全体への印象を大きく向上させる要因となりました。視察を通じて、カンボジア政府の誠実さと日本との協力への熱意を強く感じることができました。

視察において、特に気を遣った点や注意したことは何ですか？

日本とカンボジアの文化や商習慣の違いによる誤解で悪印象を与えないよう、細かな配慮を心がけました。たとえば、紹介の順番や席次など、些細なことでも丁寧に対応するよう努めました。

ただ、Mao Havannall 大臣に山口県から高知県まで7時間もバスで移動させてしまったのはさすがにまずかったです。こんなに長時間バスで移動させたのは、我々が初めてだったのではないかでしょうか。

それでも、大臣は我々に気を使わせまいと嫌な顔一つ見せず対応されました。相当お疲れになったと思います。

視察先の5社（JET、羽田空港、リアムウインド、荒川電工、技研製作所）の選定の理由やポイントは？

それぞれに個別の理由はありますが、カンボジアにとって必要不可欠な技術やサービスを提供しているか、特にエネルギーインフラ整備といった分野で直接貢献できる企業であるかを重要視しました。

もちろん他にも多くの候補がありましたし、できることなら全ての会社にご案内したいくらいでした。しかし、視察期間中に対応可能な体制が整っており、効率的に訪問できる九州、中、四国の企業に絞りました。

視察を通じて、どのような手応えを感じましたか？

視察を終えた直後の11月29日に、ファン・マネット首相が2024年から2035年までの10年間にわたる民間と政府間の優先パートナーシップを発表しました。この戦略的目標は以下の3点に重点を置いています。

- 1 交通と物流（道路と橋の建設、港湾、物流）
- 2 エネルギー
3. 公共部門（きれいな水の供給と廃棄物管理）

これらはいずれも、今回の視察内容と一致しています。プロジェクトがより迅速かつ効果的に推進されていくと確信しています。

視察を終えての感想を教えてください。

視察前、多くの企業がカンボジア進出に対して「期待3：不安7」で、不安が強い印象でした。視察を通じて、Mao Havannall 大臣をはじめとするカンボジア視察団の皆様の「何かカンボジアに役立つ技術を見つけたい」という強い意志、真摯な姿勢、協力関係を構築する熱意を感じたことで、多くの参加企業の認識が変わりました。その結果、「期待7：不安3」と、不安から期待へと逆転したと感じています。

もちろん、海外進出には一定のリスクが伴いますが、視察を通じて具体的な可能性が明確になり、企業が一步を踏み出す自信を得る良い契機となったのではないかと思います。

今回のような視察ツアーをまた組みますか？組むとしたらどのような視察をやりたいですか？

まだ具体的なことは言えませんが、次の視察プロジェクトがすでに進行中です。特に医療や教育分野に焦点を当てた視察を計画しており、カンボジアの経済課題や社会課題の解決に直結する重要な分野です。

さらにその先には、農業、漁業などの一次産業における技術革新や効率化、IT特区構想も見据えたAI、半導体、スマートシティ、さらには宇宙開発といった最先端技術の分野における視察も計画しています。

今後のJATICの展開を教えてください。

カンボジアは現在、近隣諸国と比較して人口規模や経済規模で遅れをとっていますが、GDPの向上と持続可能な社会の両立を実現させることで、カンボジアを世界一住みたい国にしていきたいですね。

そのため、JATICは両国の経済的、社会的な架け橋としての役割をさらに拡大し、日本の先端技術や文化を持続可能な形でカンボジア社会に浸透させていきます。カンボジアにおいては、日本がこれまでに経験した課題や失敗から得た教訓を共有し、同じ轍を踏むことなく効率的で持続可能な発展を遂げるお手伝いをしたいと考えています。

特集

株式会社 JET：環境技術が切り開く再生エネルギー

株式会社 JET は、環境技術を核としたイノベーション企業である。同社の主力製品である急速土着菌増殖乾燥システム（ERS システム）は、装置設置場所周辺の土壤に生存する微生物が持つ分解能力を活用し、廃棄物を肥料や燃料へ 1 日で再資源化する装置である。この革新的な技術は、廃棄物処理の効率化だけでなく、環境負荷の軽減という社会的課題の解決にも貢献している。

羽田空港内のギャラクシーホールで開催されたプレゼンテーションでは、JET 社の片山智之社長が、ユーモアを交えつつ、ERS システムの実績や技術的優位性を明快に説明した。Mao Havannall 大臣らもじっくり話を聞き入り、プレゼン後には効率性や革新性に関する質疑応答が活発に交わされ、視察団の興味の高さがうかがえた。

プレゼンテーション終了後、JET 社の下瀬眞一会長は取材に応じ、「ベトナムを含む東南アジア市場への進出計画は進んでいるが、カンボジア市場はまだ未開拓でした。この機会は非常に重要であり、確かな手応えを感じました。」と述べ、カンボジアでの事業展開への自信を示した。JET 社は、新興国市場における成長機会を視野に入れ、同社技術の活用を通じて地域の発展に貢献する戦略を進めている。

視察団は 27 日に ERS システムを導入しているベルちゃんのおうち株式会社を訪問する。この現場視察を通じて Mao Havannall 大臣らが JET 社の技術力とその実用性をさらに深く理解することが期待される。



羽田未来総合研究所：カンボジアへの空港運営ノウハウの橋渡し

羽田空港の旅客ターミナル建設や管理運営を担う日本空港ビルディング株式会社のグループ会社、羽田未来総合研究所は、地方創生や観光事業開発、空港周辺の再開発、企業コンサルティング、人材育成など、多岐にわたる事業を展開している。同社は、「東京と各地域を、そして日本と世界を結ぶハブとしての場を生かして、地域と連動しながらジャパンブランドを発信していく役割を担うこと。」をビジョンに掲げている。

Mao Havannall 大臣が管轄するデチョ新国際空港は、東南アジアのハブ空港を目指しており、羽田未来総合研究所が掲げるビジョンとの共通点が多く見られる。視察では、羽田空港の特異性として、直営運営が全店舗の 6 割を占めていること、それによる高水準のホスピタリティや非常時対応の柔軟性、さらには土地所有者である日本政府との契約形態まで、具体的な情報が提供された。

羽田未来総合研究所の河合誠専務は、Mao Havannall 大臣からの質問に丁寧かつ詳細に対応した。そのため、ターミナル見学中も質問が途切れることなく、視察団の関心の高さがうかがえた。

来年の開港を控えるデチョ新国際空港（敷地面積 2600 ヘクタール）は、羽田空港（1500 ヘクタール）の規模を大きく上回る。今回の視察を通じて、大規模空港を管轄する Mao Havannall 大臣の意気込みが伝わるとともに、カンボジアが目指すハブ空港構想への強い決意が感じられた



株式会社リアムウインド：革新的な風力発電技術

株式会社リアムウインドは、九州大学の大屋裕二名誉教授が代表を務めるベンチャー企業で、革新的な風力発電技術「レンズ風車」の設計・製造・販売・保守を専門としている。この技術は、風力エネルギーの効率化と設置場所の制約克服を実現し、再生可能エネルギー市場に新たな可能性を切り開こうとしている。

レンズ風車とは、風車の羽にディフューザの「輪」を取り付け、空気の流れを増幅し効率化する技術である。集風レンズが渦を発生させ、風車後方に低圧力領域を作り出すことで、風車に引き込まれる風量が増加する。この仕組みにより、従来の同等サイズの風車と比べて 2 ~ 3 倍の発電量を実現できる。また、風車本体の小型化と静音性を両立し、都市部や制限のある場所への設置を可能にしている。

カンボジア政府は 2030 年までに再生可能エネルギーのシェアを 70% まで引き上げることを目標としている。現在、エネルギー構成は主に水力、太陽光、バイオマスが中心だが、今年 5 月にフランス系企業がカンボジア初の風力発電所を設置する計画を発表した。この計画は、風力発電がカンボジアのエネルギー政策において新たな柱となる可能性を示しており、注目を集めている。



特集

អត្ថបទលក្ខណៈពីសែស

Memorable Photos



特集

ベルちゃんとおうち株式会社：ERS が示す酪農業の新たな可能性

山口県の酪農家、ベルちゃんとおうち株式会社は、乳牛の糞尿処理において、JET 社の ERS システム 5U 型（処理能力：25t/ 日）を導入している。

このシステムでは、処理後に生成される資源を堆肥として再利用し、地域循環型社会の実現を目指す新たな取り組みとして注目を集めている。今後、この取り組みは持続可能な酪農のモデルケースとなることが期待されている。

JET 社の ERS システムは、その多用途性が大きな特長だ。酪農業での利用にとどまらず食品加工残渣やグリストラップ汚泥、さらに病院から発生する感染性医療廃棄物も処理できる。この柔軟性により、多様な分野での導入が可能だ。

従来のバイオマス発電設備には、大型で高価であることや、バイオマス資源が地域ごとに分散しているため、小規模分散型の設備となり、結果としてコスト効率が低下するという課題があった。一方、ERS システムは、世界最小クラスのコンパクトな設計と大手メーカーの約半分以下の導入コストを実現している。さらに、カンボジアのようにバイオマス資源が集中する地域では、収集や運搬にかかるコストも低減できるため、特に効果的かつ効率的なソリューションとなり得る。

ERS システムは、実際に海外での導入実績もあり、まさにカンボジアに適した設備といえる。



荒川電工株式会社：自社開発の太陽光発電パネル検査装置

荒川電工株式会社は、太陽光発電をはじめとする再生可能エネルギーを取り入れた電気工事事業と培ったノウハウを活用したメガソーラー発電所の運営を手掛けている。

自社開発の太陽光発電パネル検査装置を導入し、納入されたパネルの不良品を効率的かつ確実に検出する仕組みを整えている。不良品には肉眼では検知できないものも多く、見逃すと発電量の低下を招くが、この装置では 1 枚あたり約 3 ~ 4 分で正確に検査が可能だ。不具合が確認されれば迅速にメーカーと交換対応を行うことで、発電効率と品質の両面で優れた運営を実現している。太陽光発電パネルの設置や運用自体は一般的だが、自社で開発した検査装置を導入し、不良品の検査を徹底する企業は極めて稀である。この取り組みは、発電効率と品質管理の両面で新たな基準を示すものであり、再生可能エネルギー市場における先駆的な事例となっている。

この検査装置の視察を行った Mao Havannall 大臣らは、担当者の説明に深い関心を示し、「今回の視察には鉱業エネルギー省の Chhuon Sambathratanak 閣下も同行しています。帰国後、この先進的な取り組みを鉱業エネルギー大臣にも報告する予定です。」と述べた。これに対し、荒川電工の荒川浩一社長は、「今回の視察が契機に、カンボジアのエネルギー分野における当社の貢献の可能性を検討していきたいです。」と前向きな姿勢を示した。

続いて訪れたメガソーラー発電所で Mao Havannall 大臣らを出迎えたのはなんとヒツジであった。雑草対策の一環として飼育され、環境に優しい運営方法として注目を集めており、専任の飼育員まで配備されている点が特徴である。



株式会社技研製作所：圧入技術で世界に挑む

株式会社技研製作所は、革新的な「圧入原理」を世界で初めて実用化し、杭打ち工事に革命をもたらした、東証プライム市場に上場する企業である。この圧入原理は、地中に既に打ち込まれた杭を支点とし、静荷重を利用して新たな杭を地中深く圧入する技術である。

1975 年、創業者北村精男氏はこの圧入原理を応用した画期的な機械「サイレントパイラー」を開発。従来工法に比べ振動や騒音を大幅に低減し、都市部や環境保護が求められる地域での施工に革新をもたらした。以来、技研製作所はこの技術を基盤に、環境負荷の軽減や効率性向上を追求した機械や工法の開発を一貫して進めている。

技研製作所の敷地内には「RED HILL1967」という展示ホールやミュージアム、実証展示場が設けられている。この施設では、来訪者が技研製作所の技術革新の軌跡をたどり、先進的な技術、製品の優位性、圧入原理を応用した実機の数々を直に体験し、その価値を理解することができる。

Mao Havannall 大臣は、展示されている「サイレントパイラー」の操作を実際に体験し、その直感的な操作性と優れた性能に感銘を受けた。この技術がカンボジアの社会インフラ整備に即座に適応可能であると実感した様子だった。Mao Havannall 大臣は、カンボジア国内の河川地域での橋梁建設など具体的な導入案を模索しており、近い将来、この革新技術がカンボジアの社会インフラの発展に重要な役割を果たすことが期待される。





日本先端技術国際インフラ協力機構

Japan Advanced Technology International Infrastructure Cooperation Organization

活動理念

日本先端技術国際インフラ協力機構（JATIC）は、日本国内で生まれた革新技術を発展途上国へ普及させ、経済的および社会的課題を解決しながら、持続可能な未来を創出する一般財団法人です。技術提供者と受け手の双方に新たな可能性を切り開き、日本の技術がグローバルな発展の原動力となることを目指しています。

活動目的

技術革新が切り開く未来

JATICは、既存の規制や利権構造の壁を越え、日本の革新技術が世界で活用される道を切り開いています。同時に、技術を必要とする国々と提供者をつなぐ「架け橋」として機能し、双方の利益を最大化するグローバルなWIN-WINの関係を構築することを目指しています。

革新技術を基盤とした持続可能な経済的および社会的発展の実現を目的に、技術普及を通じた国際協力を推進しています。これにより、カンボジアをはじめとする発展途上国の経済成長、環境保護、文化交流、人材育成など、多岐にわたる社会的発展に貢献します。また、日本の技術革新が国際的に評価され、その成果を日本国内にも還元する仕組みを目指しています。

JATICは、技術提供者と技術を必要とする国々を結び、文化的、言語的、経済的な障壁を乗り越え、各国のニーズに応じた技術普及を支援しています。その活動は、発展途上国のインフラ発展に寄与するだけでなく、経験を基に活動範囲を東南アジア、インド、中東、アフリカ諸国へと広げていきます。これにより、JATICは持続可能な開発目標（SDGs）の達成に貢献し、革新技術を基盤とした社会発展の新しいモデルを提案します。

顧問紹介

フン・マネット首相特別補佐官 在仙台カンボジア王国名誉領事

田井 進

カンボジア王国と日本国との友好親善交流において、JATICが大きな一翼を担うものと拝察し、大いに期待しております。カンボジア王国と日本国は昨年、包括的戦略パートナーシップ協定を結び、国際社会における両国の協力的重要性がますます高まっています。そのような中で、JATICがカンボジア王国の文化、持続可能な経済発展、社会発展への寄与を通じて両国の関係強化に貢献されることを確信しております。

また、JATICが推進する革新技術の普及は、日本の技術力を国際社会で発揮する絶好の機会を創出するものと存じます。今後、JATICがさらなるご発展を遂げ、世界と日本の未来をつなぐ架け橋として活躍されることを心より祈念申し上げます。



編集後記

私にとっては数年ぶりのメディアの仕事。楽観と悲観が入り混じった状態のまま取材活動スタート。その一発目に大臣の視察同行取材。カンボジアで大臣を取材するのは初めてではなかったものの、1週間近い間の同行は初めてのことで久しぶりの緊張感に懐かしさを感じるも、そんなことお構いなく視察の工程が次々押し寄せてくる。数日にわたる取材の場合、取材対象者とメディア側との関係が日に日に構築されていくのも醍醐味の一つ。初日には目線すらくれなかつた取材対象者がだんだん目線をくれるようになり、お前今ここを撮っておけよと言わんばかりの表情をしてくれたときはファインダーを通して会話をしているような気にすらなる。ファインダーを通さず直接向き合った途端にコミュ障になるのは職業病かもしれない。

JATIC NEWS

Issued 20/12/2024

Next Issue 20/1/2025

Editing and Publishing

JATIC Media and Travel Co.,Ltd.

#18, St.289, Sangkat Boeung Kok II, Khan
Toul Kork, Phnom Penh, Cambodia

096 7555 693 info@jatic.world

【Publisher】

Tep Rothavry

【Editor in Chief】

Yuji Nakamura

【Editor】

Shinichi Narusako

【Editor】

Phon Chiknick

【Staff】

Toshiyuki Akanuma

Masakazu Kobayashi